

日本語受身文のスコープ解釈可能性と二格名詞句の意味特性

高井岩生

(九州大学大学院人文科学研究院)

takai.ling@gmail.com

キーワード：二受身文，スコープ解釈，二格名詞句，付加名詞句，
属性叙述受動文

本論では、非情の二受身文のスコープ解釈を観察し、二受身文には、二格名詞句が付加詞であるものが存在するということを論じる。付加詞の二格名詞句が生起する二受身文は属性叙述の解釈が可能なものであり、ここに生起する二格名詞句は「状態性」というアスペクト的な特性を持つと主張する。まず、1節では、二受身文が容認可能になるための条件を明らかにする。2節では、二受身文のスコープ解釈を観察し、その可能性は付加詞が生起している文と同じであるということを示す。3節では、二受身文に現れる二格名詞句の意味特性について考察する。4節では、二受身文全体を網羅できるような分析案を示唆する。

1. 非情の二受身文

日本語には、以下のように、対になると考えられる能動文の二格名詞句と同じ意味内容を持つ名詞句が二格を伴って現れる受身文がある。

- (1) a. ジョンが ビルに 助けられた。 (受身文)
b. ビルが ジョンに 助けた。 (能動文)

このような受身文を Kuroda 1979/1992 に倣い、二受身文と呼ぶことにする。二受身文についての先行研究では、(2a)のように単文構造と(3a)のような複文構造のどちらからも派生するというもの (S.-I. Harada 1973, 井上 1976 など) と (3a)の複文構造だけから派生するというもの (Kuroda 1979/1992, Y. Kitagawa and

Kuroda 1992) がある。(3a)については, Kuroda 1979/1992: p.212(134)¹に基づいている。

- (2) a. [NP1 NP2 V + rare]
b. NP2 ガ NP1 ニ V ラレ
c.f. NP1 ガ NP2 ヲ V
- (3) a. [NP3 [NP1 NP2 V] ラレ]
b. NP3_(i)ガ NP1 ニ (NP2 ヲ/pro_i) V ラレ
c.f. NP1 ガ NP2 ヲ V

(2a)では, ラレは受身接辞であり, N2 の移動後に格付与が起きる。(2b)では, 言ラレは補文と心理的受影者 (affectee) を項とする 2 項述語であり, N3 が (現在の枠組みにおける) pro として生起し, ガ格名詞句と同一の指示対象物をもっている場合に, (1a)のニ受身文となる。ただ, どちらの分析であっても, ニ受身文とそれと対になる能動文は, [NP1 NP2 V]という構造を共有している。そうなら, 一方の文に NP1 と NP2 の 2 つが生起可能であるならば, 他方の文でもこれらの名詞句は生起可能なはずである。しかし, 以下の例で示すように, 基の構造では NP1 であると考えられる名詞句が, 能動文ではガ格名詞句として生起するが, ニ受身文ではニ格名詞句として生起することが不可能な場合がある。

- (4) a. ?*駅周辺の再開発計画が 自民党系の議員に 進められた。
b. 自民党系の議員が 駅周辺の再開発計画を 進めた。
- (5) a. ?*合格者の発表日が 校長に 先に延ばされた。
b. 校長が 合格者の発表日を 先に延ばした。
- (6) a. ?*国旗の掲揚が 儀仗兵に 行なわれた。
b. 儀仗兵が 国旗の掲揚を 行った。
- (7) a. ?*台風の襲来が NHK のアナウンサーに 発表された。
b. NHK のアナウンサーが 台風の襲来を 発表した。

¹ Kuroda 1979/1992 のページ, 例文番号は Kuroda 1992 のものである。

ニ受身文の例として容認可能な(1)の例では、受身主語は有情の名詞句であったが、(4)から(7)の例の受身主語はどれも抽象的な内容を表す名詞句である。井上 1976:p.77 などにおいて、抽象的な内容を持つ名詞句を主語名詞句とするニ受身化は不可能であるということが指摘されている²。しかし、(4)から(7)の例の容認性の低さを受身主語の意味特性に求めることはできない。以下の例のように、受身主語が抽象的な内容を持つ名詞句であるのにも関わらず、何の問題もなく容認可能なニ受身文が存在するからである。

- (8) a. パチンコ店の騒々しさが 近所の住民に 敬遠されてる。
b. 近所の住民が パチンコ店の騒々しさを 敬遠している。
- (9) a. ジョンの粗暴な言動が 恋人に 嫌われている。
b. 恋人が ジョンの粗暴な言動を 嫌っている。
- (10) a. 彼の早すぎる死が 世界中のファンに 悲しまれている。
b. 世界中のファンが 彼の早すぎる死を 悲しんでいる。
- (11) a. 彼の誠実な人柄が 後輩に 慕われている。
b. 後輩が 彼の誠実な人柄を 慕っている。

ニ受身文の容認性が低い(4)から(7)と、十分に容認可能である(8)から(11)を比べると、(8)から(11)に現れている述語は、一般に感情動詞や認識を表す動詞とみなせるものである。これに対し、(4)から(7)に現れている述語は、感情や認識を表しているというよりも動作を表している動詞である。能動文の場合には、述語となる動詞の意味特性の違いによって、容認性に差が生じるということはない。

さらに、ニ受身文では、別の特性も見られる。

- (12) a. ??フェルマーの定理が ジョンに 知られている。
b. フェルマーの定理が 多くの研究者に 知られている。

² 井上 1973 では、ニ格名詞句が「道具」を表すものであるならば、容認可能であると述べられている。

(i) この家は 板塀に 囲まれている。

- (13) a. ??大統領の真面目な姿勢が ジョンに 尊敬されている。
b. 大統領の真面目な姿勢が 多くの国民に 尊敬されている。

これらの文では、二格名詞句が単独の対象物を表しているのか、複数の対象物を表しているのかという違いで、容認性に差が観察される。対応する能動文では、このような差はない。

- (14) a. ジョンが フェルマーの定理を 知っている。
b. 多くの研究者が フェルマーの定理を 知っている。
- (15) a. ジョンが 大統領の真面目な姿勢を 尊敬している。
b. 多くの国民が 大統領の真面目な姿勢を 尊敬している。

このように、二受身文では、(i) 動詞が感情・認識動詞なのか動作動詞なのか、(ii) 二格名詞句が単数解釈の名詞句なのか複数解釈の名詞句なのかということが容認性を決定する要因となる。これは、能動文では見られなかったことである。このようなことから、本稿では、非情の二受身文は、能動文と(2)や(3)で示しているような対応関係を持っておらず、外項が削除された1項述語文であり、そこに生起する二格名詞句は付加詞であると主張する。

2. 二受身文のスコープ解釈

日本語におけるスコープ解釈の先行研究では、Hoji 1985 を初めとして、基底構造での量化表現のc 統御関係に基づいて、その可能性が決定されると考えられている(Reinhart 1976, Huang 1982) 。例えば、以下の(16)では、ガ格名詞句がヲ格名詞句よりも広いスコープを取る解釈は可能であるが、ヲ格名詞句がガ格名詞句より広いスコープを取る解釈は不可能である³。

- (16) 2 社以上の企業が 3 社以上の銀行を 批判した。
2 社以上 > 3 社以上

³ Hayashishita.J.-R.2004/2007 において、「2 社の企業」のような特定の個数を表す量化名詞句は、統語構造に基づかないスコープ解釈を導入する可能性があるということが指摘されている。本論でも彼の指摘に従い、「～以上」のように特定の個数を表しにくい表現を用いる。

*3 社以上 > 2 社以上

(16)の文の解釈が一義的であるのは、この文の基底構造が(17a)であって、(17b)ではないからである。

- (17) a. [2 社以上の企業が [3 社以上の銀行を 批判した]]
b. * [3 社以上の銀行を [2 社以上の企業が 批判した]]

(17a)では、ガ格名詞句がヲ格名詞句を c 統御しているが、ヲ格名詞句はガ格名詞句を c 統御していない。

(16)の文に限らず、[~ガ~ヲ/ニ]の語順になる、いわゆる他動詞文のスコープ解釈は常に一義的である。これは、他動詞文の基底構造は、必ず(17a)の構造であると考えれば説明がつく。高井 2009 では、動詞語幹の項構造には意味役割だけではなく格助詞も指定されており、指定されている順序に従って、動詞語幹とガ格名詞句、ヲ格名詞句などの項名詞句が merge すると仮定している (例えば、「批判する」の項構造は<ヲ/対象物, ガ/動作主>である)⁴。merge する順序が常に一定なので、基底構造は一通りに定まり、結果として、スコープ解釈は一義的になる。

項名詞句のスコープ解釈に対し、高井 2009 第 6 章では、付加名詞句の量化表現が現れている文のスコープ解釈は多義的であるということを観察している。

(18) ジョンが 4 ヶ所以上の地方都市で 3 つ以上の講演会を開いていた。

- 4 ヶ所以上の地方都市 > 3 つ以上の講演会
3 つ以上の講演会 > 4 ヶ所以上の地方都市

(高井 2009:p.96(1)に基づく)

(19) 4 ヶ所以上の地方都市で 3 人以上の先生が講演会を開いていた。

- 4 ヶ所以上 > 3 人以上
3 人以上 > 4 ヶ所以上

⁴ 項名詞句の基底生成位置が一定であるという考えは、以前から暗黙的な共通了解になっている。このような考えの代表的なものは UTAH である。

Uniformity of θ -Assignment Hypothesis
Identical thematic relationship between items are represented by identical structural relationship between those items at the level of D-structure. (Baker 1988)

(高井 2009:p.113(41)に基づく)

この観察に基づくと、例えば、(18)の音連鎖に対する基底構造は、以下の2通りあることになる。

- (20) a. [...付加名詞句 NP ヲ V] (付加名詞句>NP ヲの解釈が可能)
b. [...NP ヲ 付加名詞句 V] (NP ヲ>付加名詞句の解釈が可能)

Hayashishita.J.-R 2004/2007 が提案しているように、名詞句はPFで自由に移動できるという仮定に従うと、(20b)の基底構造から付加詞のヲ格名詞句を越えるPF移動が起きると、(18)の語順が派生する。この分析で注目してもらいたいのは、付加名詞句の基底生成位置は、項名詞句とは異なり、自由であるという点である。付加名詞句は、それ自体意味役割を持っているので、項構造に基づいて意味役割を付与される必要がない。そもそも、項名詞句が項構造で指定されている順序に従って、述語語幹とmergeしなければならないのは、正しく意味役割の付与が行われなければならないからである。述語語幹からの意味役割の付与を必要としないのであれば、付加名詞句と述語語幹とのmergeの順序は全く自由であってよい(高井 2009:第6章)。従って、基本的に、付加名詞句が量化表現として現れている文のスコープ解釈は多義的となるのである。

次に、ニ受身文のスコープ解釈を見てみる。以下の文では多義性が観察される。

- (21) 2種類以上のビールが3カ国以上の人に飲まれている。
2種類以上>3カ国以上
3カ国以上>2種類以上
- (22) (村上春樹の作品を調べてみると)
2冊以上の作品が3か国以上の国の人に読まれている(ことが分かった)。
2冊以上>3か国以上
3か国以上>2冊以上
- (23) (この分野が最も盛んだったころは)

毎年、2本以上の論文が3人以上の研究者に査読されていた。
2本以上>3人以上
3人以上>2本以上

スコープ解釈が多義的であるということは、ニ格名詞句の基底生成の位置は定まっていないということである。ニ格名詞句が項名詞句であり、ガ格名詞句が付加詞であるという可能性もなくはないが、ガ格名詞句が付加詞であるとする、ガ格名詞句を含む文は常にスコープが多義的になることが予測され、これは、(17)で示した事実とは合致しない。(21)から(23)における多義性は、ニ格名詞句が付加詞であり、基底生成位置が定まらないから起きるのである。(21)から(23)の各文は、以下の(24)の2つの構造のどちらであってもよい。

- (24) a. [NPニ NPガ V] (NPニ>NPヲの解釈が可能)
b. [NPガ NPニ V] (NPヲ>NPニの解釈が可能)

ニ格名詞句が付加詞であるとする、ニ受身文の動詞は1項述語であることになる。ここで、ニ受身文を派生させるラレは、基になる動詞から外項を削除する働きを持つ接辞であると仮定する。この1項化を起こすラレは、高井2013で詳細に検討したが、ニヨッテ受身文を派生させることもある。ニヨッテ受身文のニヨッテ句もニ格名詞句と同様に付加詞である。1項化を起こすラレ、付加詞のニ格名詞句、ニヨッテ句を含む簡単な派生を下に示す。

- (25) a. 世界中のファンが彼の早すぎる死を 悲しんでいる。
b. 彼の早すぎる死が 悲しまれている。
c. 彼の早すぎる死が 世界中のファンに 悲しまれている。
d. 彼の早すぎる死が 世界中のファンによって 悲しまれている

まず、接辞のラレが付加することで、基になる構造からガ格名詞句が削除される。付加詞がどちらも生起しなければ、(25b)の文になる。付加詞のニ格名詞句かニヨッテ句のどちらかが生起すれば、それぞれ(25c)か(25d)の文になる。

3. ニ格名詞句の意味特性

上で、ニ格名詞句は付加詞であると仮定した。では、どのような意味特性を持った付加詞なのだろうか。

受身文の意味特性について、益岡 1991:p106 は、「属性叙述受動文」という受身文のタイプを仮定している。益岡 1991:p106 によると、属性叙述受動文とは、「ある対象の性質や特徴を表現する「属性叙述」の文であり」、「特定の時空間における事象の生起・存在を描写してはいない」受身文である。益岡 1991:p106 では、以下の文が属性叙述受動文の典型例として挙げられている。

- (26) a. 花子の家は高層ビルに囲まれている。
- b. X は Y に含まれる。
- c. この商品は多くの人に親しまれている。

(益岡 1991:p.106(3),(4),(5))

属性叙述受動文は、「特定の時空間における事象の生起・存在を描写してはいない」ので、Kuroda 1979/1992: pp.203-206 において述べられているように、「過去」を表すタ形が生起しない。上の(8)から(11)に現れている動詞はテイル形であり、一時的な感情を表しているものではない。これに対して、(4)から(7)に合現れている動詞はタ形であり、これらの文は一時的な動作と解釈しやすい。(26)の文の述語をタ形にすると、容認性がかなり悪くなる。これは、タ形にすることで、属性叙述の解釈が難しくなったからであろう。

- (27) a. ??花子の家は高層ビルに囲まれた。
- b. ??X は Y に含まれた。
- c. この商品は多くの人に親しまれた。

(27c)のように、違和感がない場合もある。これは、Kuroda 1979/1992: pp. 204-205 で指摘されているように、「過去」ではなく「完了」と解釈できる場合である。

同様に、(12)や(13)のニ受身文が属性叙述受動文だと考えると、これらの文において、ニ格名詞句が単数を指示するのか複数を指示するのかという違いで、差が生じるということは説明できる。特定の時空間を超越して成り立つような事象を表す典型例な表現は、「総称的」(generic)文である(例えば、「多くの日本人は真面目だ」)。ニ格名詞句が複数の対象物を指示している場合には、総称的な読みが容易であり、単数の対象物を指示している場合には、総称的な読みは難しい。(12)や(13)のニ受身文では、属性叙述の解釈が強制されるため、ニ格名詞句の総称的な読みが可能であるかどうかということによって差が生じると考えられる。これに対し、(14)や(15)の能動文では、そのような解釈が強制されないので、ニ格名詞句が総称的な読みを可能しているのかどうかということによって差

が生じない。

属性叙述受動文に付加詞のニ格名詞句が生起可能であるということから、この名詞句の意味特性を次のように仮定する。

(28) 付加詞のニ格名詞句の意味特性

- a. 動作主である。
- b. 状态的である。

ニ格名詞句がこのような特性を持つために、例えば、以下のように能動文とニ受身文とで意味的な違いが生じる。

- (29) a. 子供達は「蛍の光」を歌っている。
b. 「蛍の光」は子供達に歌われている。

(29a)では、一時的な行為を表していると考えられるが、(29b)では、「蛍の光」という歌は「子供達に歌われるものである」という一般的な属性を述べている文と理解できる。(29a)及び(29b)の動詞はどちらもテイル形であるが、(29b)では、テイル形が恒常性・習慣を表している場合に、ニ格名詞句が述語と意味的に適合するので、結果として、恒常的な特性・習慣という解釈の方が強くなると考えられる。

(28)では、格助詞の意味特性に「状態性」というアスペク的な特性を含めている。これまで、格名詞句のような付加詞は単に何らかの意味役割を担うものと考えられてきたことが多かった。しかし、述語との間でアスペク的な意味的な適合関係を持つと考えれば、他の現象も説明することができる。例えば、以下の例では、どちらにも「移動の経路」を表すヲ格名詞句が現れている。しかし、容認性に差が感じられる。

- (30) a. ?*枯れ葉が 夜空を 落ちた。
b. 枯れ葉が 夜空を ゆっくりと 落ちてきた。

この文に現れているヲ格名詞句は「移動の経路」という意味役割だけではなく、例えば、[継続性]という意味特性を持っていると考えれば、述語部分が「継続的」と解釈可能な意味特性を持っている(30b)には容認可能になるというような説明ができる。(30a)の述語は「継続性」という特性を持っていないので、ヲ格名詞句との適合性が低いのである。

同様に、付加詞の二格名詞句も自由に生起できるわけではなく、動詞のアスペクト的な特性との適合関係に基づいて、その生起が決定するのである。

4. まとめと今後の課題

Kuroda 1979/1992 のニ受身文の分析では、受身主語は「心理的受影者」という意味役割を担っている。その結果、ニ受身文は、対応する能動文と同じ意味内容に加えて、「その主語が表す主体が、要素能動文の表す事態によって、その状態に何らかの意味で変化を蒙る」(黒田 2005:p150) というニ受身文特有の意味特性を持つようになる。Kuroda 1979/1992:p.206 を参照してもらいたい。

- (31) a. フェルマーの定理が ジョン*に／によって 証明された。
(Kuroda 1992:p.206(113), (114))
b. 開会が 議長*に／によって 宣言された。
(Kuroda 1992:p.206(110), (111))

Kuroda 1979/1992:p.206 によれば、これらの例において、二格名詞句が生起している場合に容認性が低いのは、受身主語名詞句が「フェルマーの定理」や「開会」などの抽象的な名詞句であり、これらの抽象物は「証明する」、「宣言する」の行為が行われたとしても、状態の変化を蒙らないからである。これらの例を属性叙述受動文の解釈が可能な形式にすると、次のようになる。

- (32) a. フェルマーの定理は すでに 数多くの研究者達に 証明されている。
b. ??開会は 毎回、議長に 宣言される。

(31a)の容認性はかなり高くなるが、(31b)の容認性は悪いままである。この事実は、Kuroda 1979/1992 が仮定しているように、ニ受身文には、心理的受影者を主語名詞句とするものも存在することを示している。本稿で仮定したニ受身文と合わせると、ニ受身文には次の2つのタイプがあることになる。

- (33) a. NP_(i)ガ NPニ (NPヲ／pro_i) Vラレ (ル)
b. NPガ (NPニ) Vラレ (ル) (NPニは付加詞である)

(33a)は、「心理的受影者」を主語とするニ受身文で、主語名詞句が表わす対象

物が何らかの状態変化を蒙るという解釈になるものである。一方、(33b)は、ニ格名詞句が「動作主」と「状態性」の意味特性を持つ付加詞であり、属性叙述の解釈を持つ受動文である。Kuroda 1979/1992 が述べているように、抽象的な内容を持つ名詞句が「心理的受影者」になりにくいとするならば、ニ受身文は基本的に次のようになっていると考えられる。

- (34) a. [有情] _(i)ガ NPニ (NPヲ/pro_i) Vラレ (ル)
b. [有情・非情] ガ (NPニ) Vラレ (ル)

当然、有情と非情の区別は絶対的なものではなく、話し手の常識や世界知識などで、何を有情とみなし、何を非情とみなすのかということは変化する。

謝辞

本論の執筆にあたり、2名の査読者より、内容から書式に至るまで大変丁寧なコメント、ご指摘を数多く頂いた。特に、論文の内容を再考するためのきっかけになるようなコメントをいただいたのはとてもありがたいことであった。本稿が完成したのは、これらのコメント、ご指摘に負うところが大きい。深く感謝する次第である。

参考文献

- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (上)』 大修館, 東京.
黒田成幸 (2005) 『日本語から見た生成文法』 pp 145-156. 岩波書店, 東京.
高井岩生 (2009) 「スコープ解釈の統語論と意味論」 博士論文 九州大学.
寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版, 東京.
益岡隆志 (1987) 『命題の文法』 くろしお出版, 東京.
益岡隆志 (1991) 『日本語のヴォイスと他動性』 仁田義雄 (編) pp.105-121. くろしお出版, 東京.
Harada, S.-I. (1973) 'Counter equi NP deletion.' *Annual Bulletin of the Research Institute of Logopedics and Phoniatics*, 7, 113-147.
Hayashishita, J.-R. (2004) *Syntactic and non-syntactic scope*. Doctoral dissertation, University of Southern California.
Hayashishita, J.-R. (2007) *Syntactic and non-syntactic scope: Remarks on the study of LF properties utilizing quantifier scope*. A course given at the Kyushu

University. January 22- 25.

- Hoji, Hajime. (2008) 'Reconstruction Effects in Passive and Scrambling in Japanese'. *Japanese/Korean Linguistics 13*, ed. by Mutsuko Endo Hudson, Peter Sells and Sun-Ah Jun, 152-65. Stanford, CA: Center for the Study of Language and Information.
- Hoshi, Hiroto (1999) 'Passives'. *The Handbook of Japanese Linguistics*, ed. by Natsuko Tsujimura, 191-235. Oxford: Blackwell.
- Huang, C.-T. James (1982) *Logical relations in Chinese and the theory of grammar*. Doctoral dissertation, MIT.
- Kitagawa, Y and Kuroda, S.-Y. (1992) 'Passive in Japanese.' MS, University of Rochester and University of California, San Diego.
- Kuroda, S.-Y. (1978) 'Case Marking, Canonical Sentence Patterns, and Counter Equi in Japanese (A Preliminary Survey),' in J. Hinds, I. Howards, eds., *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, Kaitakusha, Tokyo
[Also in S.-Y. Kuroda (1992) *Japanese syntax and semantics*: 222-239. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.]
- Kuroda, S.-Y. (1979) On Japanese passive. In George Bedell, Eichi Kobayashi and Masataka Muraki (eds.), *Explorations in linguistics: Papers in honor of Kazuko Inoue*: 305-347. Kenkyusha, Tokyo
[Also in S.-Y. Kuroda (1992) *Japanese syntax and semantics*: 183-221. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.]
- Reinhart, Tanya (1976) *The syntactic domain of anaphora*. Doctoral dissertation, MIT.

The Scope Interpretations in Japanese Passive Sentences and Properties of the *Ni*-marked Noun Phrases

Iwao Takai
(Kyushu University)

In this paper, I claim that the *ni*-marked NPs are adjuncts in *ni* passive sentences, in which the subject (*ga*-marked NP) is inanimate. The *ni*-marked NP in this type of passive sentences has the following properties. Firstly, it is allowed to take a wide scope over the subject (*ga*-marked NP) in $[NP-ga \ NP-ni \ V-rare]$. Secondly, there are cases where the *ni*-marked NP is prohibited. Lastly, the NP must have generic reading. According to these observations, I assume that the *ni*-marked NP is an adjunct, and also it has an aspectual property 'stative'.

(初稿受理日 2014年4月5日 最終稿受理日 2015年2月10日)